

# 特別展示室より～本物を見る～

先日、本館2階特別展示室において、企画展「古典籍の魅力」が終了しました。1ヶ月半の開催期間中、700名を超える方々にご覧いただき、皆さまの歴史に対する関心の高さが感じられました。

今回、本館が明治35年開館以来収集・管理してきた古典籍をご紹介してきたわけですが、ひと口に古典籍といっても、それらの収集経路や内容は多岐にわたります。今回、その一部をご紹介いたしました。

鑑賞された皆さまは、100年以上前の歴史史料に大変興味深そうに見入っていました。小学生も100名以上入場していますが、徳川光圀が編集した「大日本史」や、坂本龍馬の傍らにあったと言われる「万国公法」、江戸時代の辞書であった「和訓栞」などに目を輝かせて見入っている姿がありました。

皆さまの関心を集めたポイントは何だったのでしょうか。

それは、目の前にあるものが「本物」である、ということに尽きるのではないかと思います。内容もさることながら、鮮明かつ芸術的とも言える流麗な字体、細かな線一つ一つにまでこだわった繊細なさし絵で著された書籍には、数百年前とは思えない製本職人、活版職人の技術、芸術性といった世代を超えて魅せられるものがあります。目の前の史料が「本物」である、という意識の後ろで、私たちは当時の人々の息づかいを感じ、無意識の会話をしているのかもしれない。私たちの祖先の文化レベルの高さ、物作りへの高い意識を感じる展示会でもありました。

見逃した方のために、展示した古典籍のほんの一部ですが、ご紹介します。

## 『近思録』

朱熹編 安政5年(1858)再版 明治4年(1871)再刻

宋の朱熹と呂祖謙が、宋学を始めたとされる張載ら4人の文章から日常に緊要な章句622条を選び、編纂した朱子学の書。初めて朱子学を学ぶ者にもわかりやすいように14部門に分けられ、朱子学では『四書』『小学』とともに尊重される。江戸時代、各地の藩校や儒学塾で講義された。本書は佐土原藩校学習館が版をもつ蔵版本である。



## 『大日本史』

徳川光圀編 明治39年(1906)出版

水戸藩主徳川光圀が明暦3年(1657)に編さんを開始し、明治維新後は同家が事業を継続。明治39年(1906)まで約250年かけて編さんされた、紀伝体の歴史書。光圀は江戸小石川に彰考館を設置し、全国各地から多くの学者を集め、林家の『本朝通鑑』に対抗して作成したとされる。歴史の学問的研究に貢献しただけではなく、「水戸学」を通じて尊皇思想の発達に大きな影響を及ぼした、藩版の象徴的な存在である。



## 昔の記憶への誘い

ある入場された方の中から、「初めて見るけど、なにか懐かしい気がするね。」などという声が聞かれました。自分自身も古い絵や仏像の前で同じような気持ちになった体験があります。絶対的な長い時間の隔りがあるはずなのに・・・子々孫々受け継がれたきたのは意識としての記憶だけではなく、DNAレベルで見聞したことが受け継がれているのかもしれない。日々の生活の中で、考え、行動して過ごす時間と時間の間の切れ間に差し込んでくるように、思いもよらないイメージはやって来ることがあるようです。行ったことのない所なのに何処かしら懐かしい感じがする、という経験も同様なのかもしれません。昨年度の芥川賞受賞者、朝吹真理子さん曰く、「ヴィジョンはとりとめのないことを考えているときに来る。因果の向こうからあらわれているのだろうと思う・・・」、受賞作「きことわ」もそうしたヴィジョンがきっかけとなって生まれた、と言われていました。先日、本館で講演された木城えほんの郷村長の黒木郁朝さんは、「本館のイメージは、日々の生活の時間の流れの中ではなく、

例えば、素晴らしい芸術作品に出会った後の余韻の中で生まれ、形作られるのです。」とおっしゃいました。時には皆さまも時空や空間を超えて存在している「本物」にふれ、日々の生活から、無意識に訪れる「ヴィジョン・イメージ」に身を委ねてみるのはいかがでしょうか？(いつも訪れるかどうかわかりませんが・・・)

今後も、図書館では貴重な「本物の」史料を皆さまにご紹介していきます。どうぞお楽しみに！

### 【特別展示室企画】

特別展『瑛九』 前 7/20~8/7 後 8/30~9/19

特別展『日向国「那珂郡」の歴史』

10/25~12/11

企画展『家族の肖像』 1/24~3/12

共催展『県埋蔵文化財センター移動展』

8/13~8/23

(情報提供課 郷土情報担当 O)